現地レポート１　地域で育つ　農業体験で変わる！

田んぼの先生は地元の農家

野菜づくりやヤギの世話

輝いてくる子どもたち

田んぼの先生の見守るなか慎重に苗を植える

■我孫子市立第二小学校による農業体験

千葉県の我孫子第二小学校は、地域の協力のもと、農業体験学習に積極的に取り組んでいる。子どもたちは米作りや野菜づくりのほか、大工仕事などもこなす。この地域ぐるみの取り組みのきっかけは、平成４年にＰＴＡの協力でおこなった鶏小屋の改築。以降、農業や手仕事など暮らしの知恵・技術が授業に組み込まれていき、「ふれあい王国」「わくわく動物ランド」（飼育場）、「ゆめ広場」（工作室）、「じゃぶじゃぶ池」などの施設もできた。「地域の先生」や卒業生の参加で活動は広がり、全国の教育関係者の注目を集めている。

「地域の先生」が体験学習に協力、プロのわざを学ぶ

我孫子第二小学校は生徒数約 400 名、学級数 12 の、いわゆる中規模の公立小学校だ。だから、教職員は 30 名ほど。ところが、この学校には教職員のほかにも、体験学習を指導してくれる大勢の先生がいる。

田んぼの先生、畑の先生、大工の先生、豆腐の先生、手話の先生・・。実は、これらの「地域の先生」は近所に暮らす大人たち。地元の農家をはじめ、大工さん、豆腐屋さんなどが自分の専門技術で指導してくれたり、おじいさん、おばあさんたちが自らの体験を教えてくれる。

初めて同校を訪れた日も、先日おこなった豆腐づくりのビデオが校長室で流されていた。３年生が畑でつくった大豆をどうするか話し合った結果、「豆腐をつくろう」ということになったのだ。それなら、地域の先生をさがそう・・。まず、代表者２名が朝４時半起きで、地元の豆腐店で豆腐づくりを見学。その後、学校まで豆腐の先生が指導に来てくれた。家庭科室で家庭用ミキサーなどを駆使して試行錯誤のうえ、絹ごし豆腐が完成。プロのコツをしっかり教えてもらったので、見た目はともかく味のほうは格別だったという。

５年生は米づくり、２年生はどろんこ遊びで予行演習

同校では、地元の農家から田畑を借りて全児童が農業体験をしている。校庭につくられた広い牧場で飼っているヤギや羊の世話も子どもたちがする。つくる作物は年によって若干変わるが、たとえば１年生はサツマイモ、２年生はトウモロコシとカボチャ、３年生は大豆、４年生は・・といった具合である。

農業体験のメインイベントともいえるのが５年生の米づくり。この米づくりでは、種モミからモチ米を育てている。５月に代かきをしたあと田植え直前に２年生たちが田んぼどろんこ遊びをするが、これも田起こしなど田んぼに入るための予行演習になる。

秋の収穫祭では、５年生が在校生全員とお世話になった人たちに配るお餅をつく。機械を使うといっても４俵余の餅をつくのは大変な作業だ。

先生もいっしょに思う存分どろんこ遊び

「いっしょに米づくりをしていると、子どもたちがどんどん変わっていくのがわかります。最初は不安そうに田んぼに入っていた子どもの顔が、穂が出るころから輝いてくる。半年後の収穫祭のときは、みんな自信満々の顔になりますね」と、いう向さんはベテランの田んぼの先生。ふだんは機械で田植えをしているので、子どもたちに教えるために稲の持ち方を何度も練習したという。今年度、向さんから田んぼの先生を引き継いだ小池さんは、機械植えと手植えの違いを子どもたちに見せるために、わざわざ昔使っていた二条植えの機械を修理して田んぼに持って行った。ちなみに２人とも我孫子二小の卒業生である。

なお、６年生は、これまでの体験や新たに取材した郷土の情報をまとめてホームページをつくっている。

田畑の中では子どもたちの新しい面が見えてくる

「実は子どもも母親の私も、最初はどうして学校で畑仕事なんてやるんだろうと思っていました。でも、子どもは２年生にどろんこ遊びをして、私は PTA の手伝いで野菜の育っていくさまを目の当たりにして、見方が変わりました。作物をつくるのは楽しいですね」と、５年生の子どもをもつ岡本さん。農業体験の準備などを手伝うなかで、地域のたくさんの大人たちに育まれている二小の子どもたちは幸せだな、と思ったという。実際、農作業や羊の世話などは地域の人びとの応援がなければ、やりきれない。農作物の管理や家畜の餌の確保、そして、体験に必要な道具の用意などは地域の先生やＰＴＡだけでなく、地元の人たちの積極的な協力があってはじめて可能になるのだ。

また、２年生の母親である和田さんは、農業体験がらみのイベントなどで先生や子どもたち、他の父母や地域の人たちとふれあう機会が増え、風通しのよさを感じているという。

「田畑の中では、子どもたちが違って見えます。一生懸命に畑仕事をしている子どもたちを見て、だれにでも活躍の場はあるんだと、改めて思いました。農業体験では、よく気がつくとか、みんなが嫌がる仕事を進んでやるとか、かくれた子どもたちのいい面がたくさん出ますね」と和田さん。

さまざまな活動で、子どもたちに宿る体験の力

我孫子二小の子どもたちは中学生になると、周囲から「自分の考えで行動する」とか「ものおじしない」とか、よく言われるという。「委員や係になりたい人は？」と言われて、すぐに手を挙げるのも二小出身の子どもだ。

卒業生の中学２年生たちに農業体験について聞いてみた。

「中学の社会科の授業で千歯こきが使えるといったら、先生がびっくりしていた」

「５年生の米づくりでは、収穫祭のときに自分たちで各学級にお餅を配りに行くんだけど、低学年のころは早く５年生になって、お餅を配る側になりたかった」

「米づくりをモミの選別からやったことのある人なんて、そういないよ」

「しめ縄づくりの先生だったじいちゃんは、何でも知ってるし、手先も器用だった。ああいうじいちゃんになりたいな」

「地域の大人の人たちと話したり、いっしょに作業をしたりしたから、大人の前でもちゃんと意見が言える」

子どもたち自身が小学校時代の農業体験を、それを支えてくれた先生や地域の大人たちを、そして自分たちの住んでいる地域を見つめ直すのはもう少し先のことかもしれない。しかしながら、子どもたちが農業という体験をしっかりと心身で受け止めているのは確かなようだ。

（協力：我孫子第二小学校、取材：蜂須賀裕子）